

大津籠城戦と京極氏

滋賀県立大学教授 中井 均

大津にお城があったといえば驚かれる方も多いと思いますが、現在の浜大津に天守を持つ城がありました。戦国時代の湖南の中心は明智光秀の築いた坂本城でした。それは海津や朝妻などの港から運ばれる北陸、東海の物資の集積地としての坂本港が存在したことによります。坂本は山中越により京都への最短距離の港です。その港を守るために築かれたのが坂本城でした。だからこそ、天正10(1582)年の本能寺変後も再建されて機能したわけです。

ところが天正11年に豊臣秀吉が大坂城を築くと、首都機能が大阪に移ります。琵琶湖の船運によって持ち運ばれた物資も大阪へ運ぶようになります。そうすると逢阪を越える東海道が重要視され、坂本より逢阪により近い大津港が注目されます。その大津港を守るために築かれたのが大津城でした。天正14年頃のことです。初代の城主は浅野長政で、その後、増田長盛、新庄直頼といった秀吉の側近が城主となります。そして文禄4(1595)年には秀吉の愛妾松の丸殿の兄である京極高次が6万石で入城します。

大津城は港を守るには最適でしたが、立地的には周囲より低い位置にあり、城という防御施設としては問題がありました。慶長5(1600)年の関ヶ原合戦に際して、城主京極高次は東軍徳川家康側に与します。関ヶ原に向かう西軍の毛利元康、立花宗茂らの軍勢は高次の立て籠もる大津城を攻めます。そのとき西軍は長等山より大砲を放ちます。琵琶湖に面した大津城はまさに狙い撃ち状態となりました。低い位置に築かれた弱点が露呈したのです。このとき、京都の町人たちは弁当持参でこの大砲の砲撃を見物しています。



大津籠城戦は三の丸、二の丸が焼け落ち、いよいよ本丸を残すのみとなり、ついに9月14日に高次は開城に踏み切り、自らは高野山に退きました。しかし、この大津籠城戦の結果、毛利元康らは関ヶ原合戦に間に合わず、東軍の勝利となりました。家康はその戦功として高次に若狭小浜8万2千石を与えました。さらにその子、忠高は出雲・隠岐26万石の大大名に出世しますが、嫡子なく京極家はお家断絶に追い込まれます。しかし、大津籠城戦の戦功により断絶は免れ、播州龍野6万石に減封されます。振出に戻って大津城主のときの石高で今一度仕え直せという幕府の思いであったようです。

関ヶ原合戦に勝利し、京都に向かう家康は大津城で戦後処理をおこないます。家康が最初におこなったのは大津城の再建でした。しかし、軍事的にリスクのある立地であるため大津では再建されず、新たに築かれたのが膳所城でした。そして残されていた大津城の天守は解体され、彦根城に移築されます。それが現在国宝に指定されている彦根城天守です。この移築はエコロジーではなく、「此殿守ハ遂ニ落不申目出度殿主ノ由(大津城の天守はついに落城しなかった、めでたい天守のこと)」であったからでした。

中井 均(なかい ひとし)

1955年大阪府生まれ。龍谷大学文学部史学科卒業。(財)滋賀県文化財保護協会、米原市教育委員会、長浜城歴史博物館館長を経て現職。滋賀大学、金沢大学非常勤講師。NPO法人城郭遺産による街づくり協議会理事長。専門は日本考古学。特に中・近世城郭の研究。